

読者参加G(ゲーム)ノベル

祝！TVアニメ

第４話
夏にティラは恋をする!?

爆れつハンター Special

あかほりさとる

イラスト／臣士れい

正式決定!!
10月オンエア開始!!

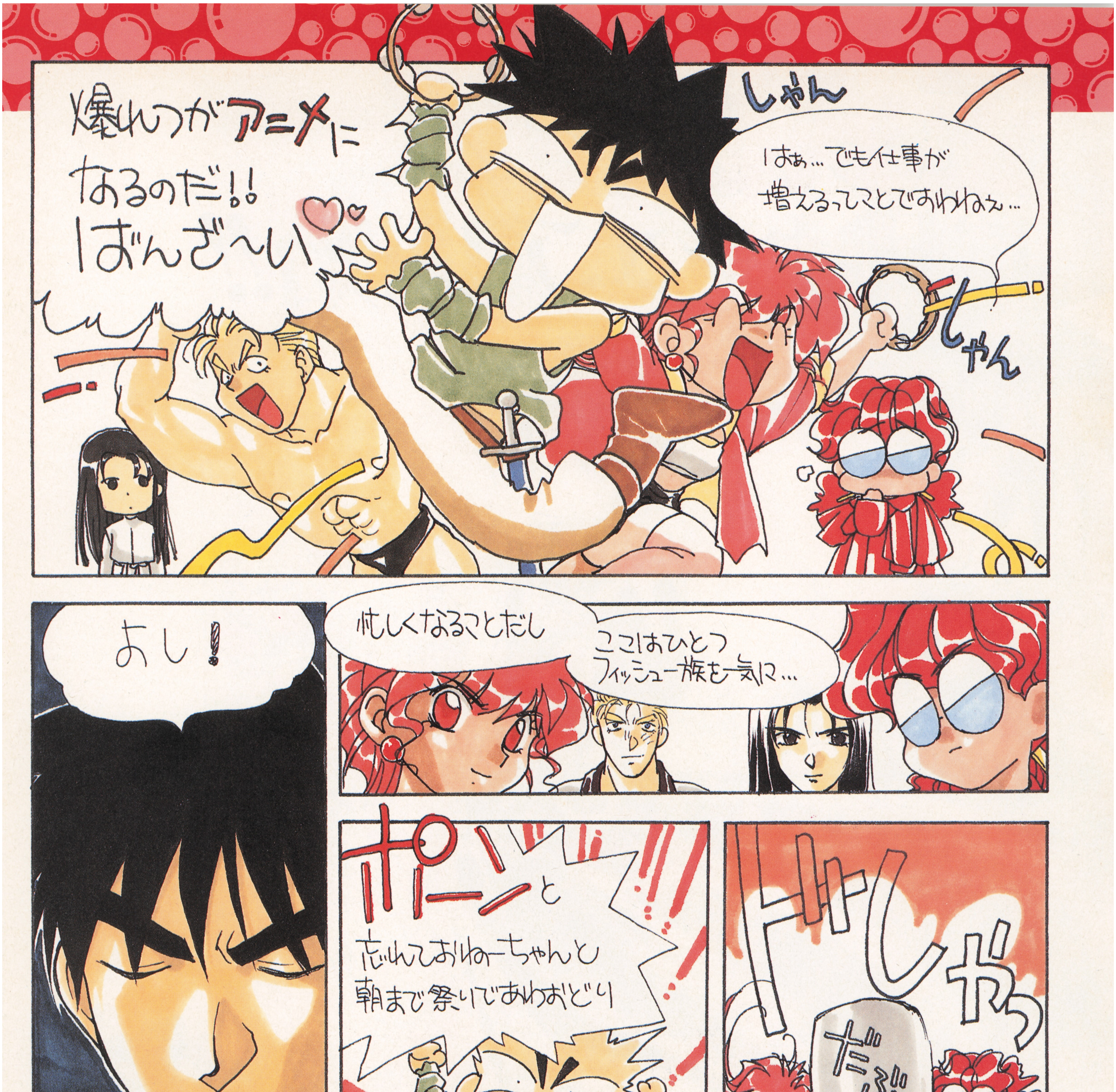


制作スタッフも大爆れつ!!

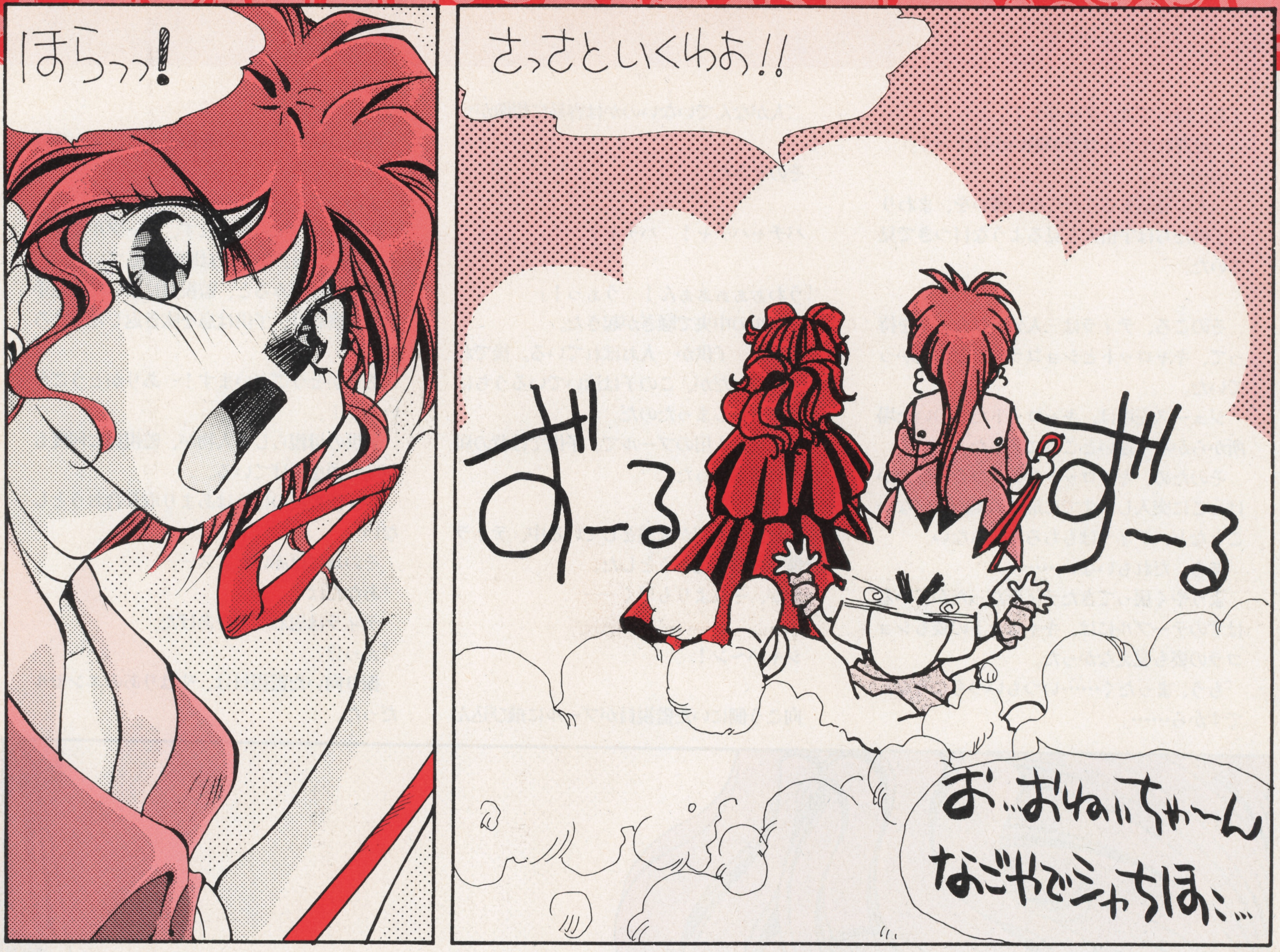
ついに正式発表となった「爆れつハンター」のテレビアニメ化。監督に真下耕一氏、シリーズ構成に川崎ヒロユキ氏を迎え、キャラデザインに後藤圭二氏、音楽に川井憲次氏、そして音響監督に斯波重治氏という最強布陣となった。

キャスティングや絵回りの情報は次号に譲るが、まずは今秋10月オンエアスタート決定の速報だ!!





爆れつがアニメになるのだ!!
ばんざ〜い
しゃん
はぁ…でも仕事が増えるってことですわねぇ…
しゃん
よし!
忙しくなることだし
ここはひとつフィッシュー族も一気に…
フ…
ポーンと
忘れておねーちゃんと朝まで祭りであわおどり
だーっっ
ドかしゃっ
だぶる
100t
むぎ



1

「青い空……」
真っ青な空が広がっている。
「白い雲……」
遥か彼方に大きな入道雲が姿を見せている。
「照りつける太陽……」
太陽はさんさんと照りつけ、日差しは強い。
「まさに理想的な夏の日。それなのに……なんでここは海じゃねえんだッ！」
キャロットが怒り心頭達した表情で叫んだ。
ここは帝都ファザードの市営プールだ。
市営プールといっても、流れるプールやら、飛び込みプールやらいくつかあって、かなりでかい。が、やはりというべきか、ギャルの姿は皆無に近く、親子連れの姿がやたらと目立つ。
「こんなナンパ日和に、オレは海へも行けず、市営プールなんかに……」
「しょうがないでしょ。フィッシュ一族の件があるかぎり、帝都を留守にするわけにはいかないんだから。それに、市営プールに行こうって言ったの、ダーリンじゃないの」
キャロットの横でショコラが言った。
そのダイナマイトボディに小さな水着をつけている。
「くうっ……もしかしたらと一縷の望みをかけておったのだ」
「あたしがいるじゃない、ダーリン」
ショコラはそのままキャロットに抱きついていく。
が——スルリ。
キャロットは巧みにショコラの腕を抜け出した。
「むっ、やるわね、ダーリン！」
「フフフ……伊達にいつもいつもおまえに抱きつかれられているわけじゃねえぜ！」
キャロットとショコラは構えたまま、じりじりと相手の動きを追う。
これじゃあほとんどリングに入ったプロレスラーだ。
「マロンはどうした？」
「フィッシュ一族のことを調べてみるって、帝国公文書館へ行ったわよ」
「ガトーは？」
「日課のボディビル道場へ行ってからここに来るって」
「ティラは？」
「飲み物買いに行ってるわ」
会話をしている間も、キャロットとショコラはお互いの動きから目を離さない。
隙を見せたら負けだ！（なにが？）
「あ、UFO！」
「えっ？　どこ、どこ？」
いきなりの間抜けな攻撃でショコラの気をそらすと、キャロットは一気にプールに飛び込んだ。
泳いでいるというよりも、それはほとんど水面を駆けている。

「あ、待ってよ、ダーリン！」
一足遅れてショコラが追いかけていく。
「…………」
二人の息詰まるくだらない戦いを、まわりの子供たちは宇宙人を見るような目つきで見ていた。

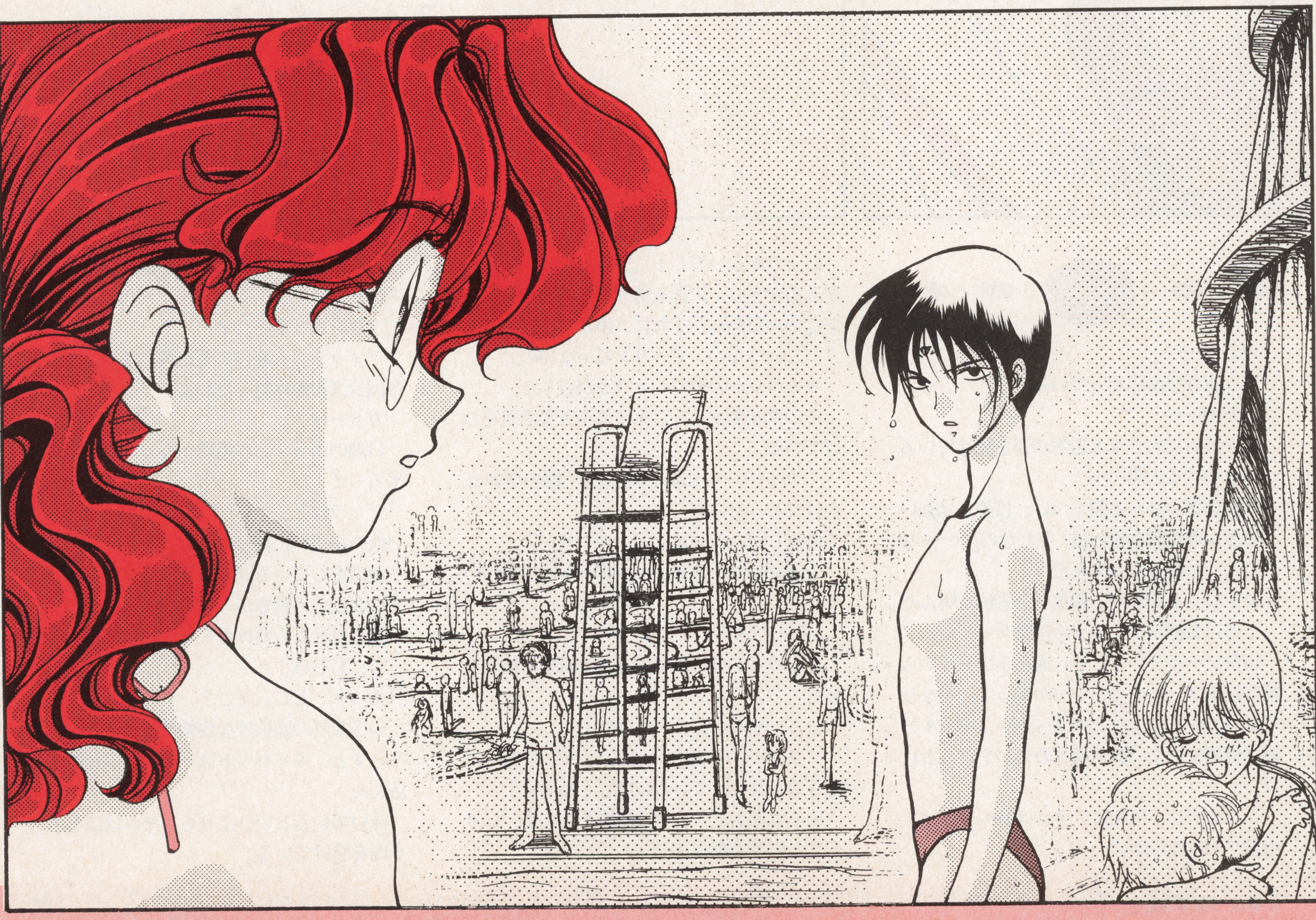
そのころ、ティラは三人分のジュースを持って、キャロットとショコラのもとに向かっていた。
ジュース売場は、キャロットたちのいた場所からかなり遠いところにあった。
そのため、キャロットとショコラが追いかけっこに突入し、すでに最初の場所にいないことなど、ティラはもちろん知らない。
「あら、だれもいない……」
ようやく戻ってきたティラだったが、いるはずのテーブルには、キャロットの姿もショコラの姿も見えなかった。
「もう、まったく……いつもいつもこうなんですから……」
二人がなんでいないのかは容易に想像がつく。
そのときだ。

バチャバチャ！　バチャァン！

「うわぁぁぁぁぁん！　うぁっ！」
プールの中央で騒ぎが起きた。
見れば、子供が一人おぼれている。後でわかったことだが、この子は泳いでいるうちに足をつってしまったのだ。
そこは大人用のプールで、子供では背の届かない深さだった。
「大変！」
まわりの人間が呆然としている中、ティラは慌てて飛び込もうとした。
だが、それよりも早く——

ジャバ〜ン！

向こう側にいた監視員がプールに飛び込んだ。
監視員は素早く子供を抱えると、プール縁に戻ってくる。
「よかった！」
いてもたってもいられず、テーブルにジュースを置くと、ティラは駆け出していた。
駆けつけてみると、監視員によって応急手当てが終わり、子供は息を吹き返したところだった。
「ありがとうございます！　ありがとうございます！」
子供の母親らしき人物が、監視員に何度も何度も頭を下げている。
が、監視員のほうはあまり取り合おうとしない。
その耳には赤いピアス——
「あなたは！」
ティラは思わず声をあげた。
「えっ!?」
振り向いた監視員は、やはりあのエンゼルだった。





2

話は少し前に戻る。
エンゼルはサカナヤ山脈のフィッシュ一族の本拠地にいた。
エンゼルのすぐ前には玉座があり、そこに当主のフィレオ＝フィッシュ公爵が座っている。
エンゼルの父親だ。
「オヤジ……今さら何の用だ」
「ひさしぶりだな、エンゼル」
あまり友好的とはいえないあいさつをかわした後、両者の間は沈黙が支配していた。
どちらも、相手をじっと見つめたまま、視線を離さない。
やがて──

ガタッ……

公爵がゆっくりと立ち上がった。
そのままエンゼルのもとに近づいていく。
「…………」
エンゼルは不審そうに父親の動きを見つめている。
公爵は厳しい表情のまま、エンゼルの眼前に立った。
そして──抱きしめ！

ドゴォォォォォォォォォォッ！

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
エンゼルの拳がまともに公爵の顔面を直撃し、公爵は大きく床に叩きつけられた。
「てめえのそういうところがキライなんだよ！」
エンゼルが吐き捨てるように言う。
公爵のほうは、さっきまでの厳しい表情はどこへやら、
「う〜ん、エンゼルのバカ！　ひさしぶりに会ったんだから、いいではないか！」
などと甘えたような口調になっている。
オェ〜。
「だからなんの用だ、オヤジ」
「うむ、実はな……エンゼル、おまえにも我が公爵家の後継者レースに参加してもらおうと思ったのだよ」
そう言いながら、公爵はまたしてもエンゼルに身体を密着させ、抱きしめ態勢に入っていた。
「だからやめろっ！」

ドガァァァァァァァァァァッ！

二発目のストレートが決まり、公爵はきれいな弧を描いて、床に倒れ込んだ。
そこへ──
「こらっ、エンゼル！　父上になにをする！」
「そうですわ！　エンゼル、父上に謝りなさい！」
オータムと落第セーラー服を着たゼリーがいきなり部屋に飛び込んできた。
どうやら両者は扉の外で中の様子をうかがっていたらしい。
ゼリーとオータムが両脇から公爵を抱き起こして言った。
「父上、このような家を出たヤツを呼び戻すなんてもってのほかですぞ！」
「そうですとも！　我が公爵家はエンゼルなどいなくとも、十分やっていけます」
だが、公爵は二人の手を振り払って言う。
「え〜い、黙れ！　わしはエンゼルが好きなんじゃ！」
「ち、父上！」
「そ、そんな……」
「顔立ちなど、年を追うごとにアフロディーテに似てくる」
公爵の口から、「アフロディーテ」という名前が出たとき、エンゼルの顔色が変わった。
どこかキレたような、怒りの表情が顔を覆(おお)う。
「おまえがその名を言うな！」
三度(みたび)、エンゼルが拳を繰り出した。

ゴガァァァァァァァァァァッ！

けっこうみんな、おもしろいペンネームを考えてくるよな。特に今月はそんなハガキが多かったぞ。そんでは2発目。「"屋根が壊れてる" "や〜ネ!!"…うわ〜おもんねぇ〜」（大阪府・ペンネームまたたび天国）　……コリャまた本当にベタベタだな。まっ本人もわかってるようだからさっさと次にいこうか。

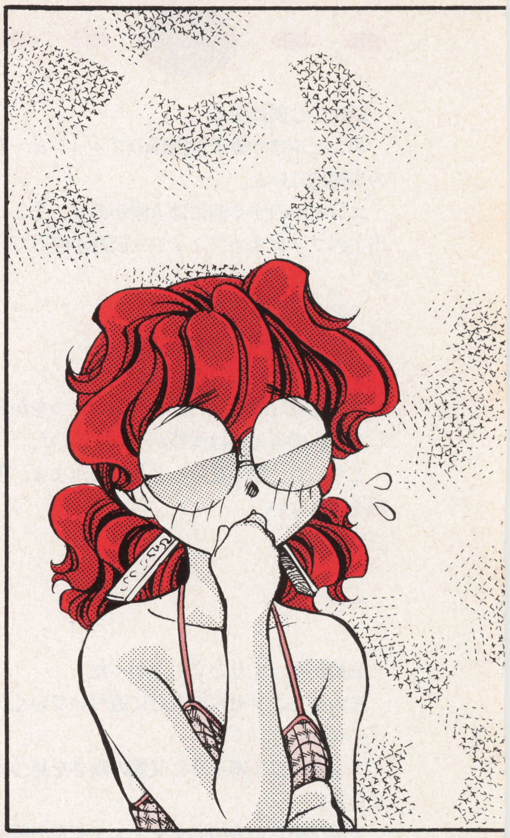
「あがががが……」
だが、今度は公爵も予測していたのか、とっさにゼリーの顔で、その拳を防いでいた。
ゼリーの端正な顔がひしゃげたのは言うまでもない。
「オヤジ！　おまえがお袋の名前を言うな！」
エンゼルは感情をむき出しにして叫んでいた。
公爵に向けられたのは憎しみの瞳だ。
アフロディーテとは、エンゼルの母親の名前だった。
「オヤジ、はっきり言っとくぜ！　オレはあんたのことを憎んでいる！　あんたには一文の世話にもならねえ！」
それだけ言うと、エンゼルは公爵に背を向けて、部屋から出ていこうとした。
扉をくぐる直前、入ってきたソードと偶然、出会う。
「エンゼル兄様！」
「ソードか……」
ソードはエンゼルを見て、破顔した。
エンゼルもソードには暖かい視線を向ける。
「…………」
エンゼルはソードの頭をやさしくなでると、その場から去っていった。
「まったふ（く）、ふぉん（とん）でもないヤフ（ツ）でふ（す）！」
顔を腫らしたゼリーが言う。
「我が公爵家の名折れですわ、お父様！」
オータムも兄に追従したように言うが、公爵は聞いていなかった。
公爵は、エンゼルの消え去った方向を見ながら、こうつぶやいた。
「エンゼルのいけず……」

3

ズルズルズル……

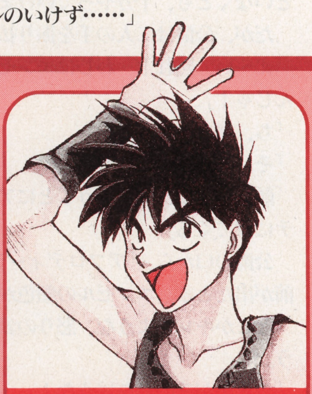
キャロットを引きずって、ショコラはようやく元の場所まで戻ってきた。
キャロットの頭には大きなタンコブがあり、目を回している。
キャロットを仕留(しと)めるのに要した時間はおよそ30分というところだった。
「あら？」
元の場所まで来て、ショコラはテーブルの上に置いてある三つのジュースを見ると不思議そうな顔をした。
「ティラ!?　どこ行っちゃったんだろ？」

ティラはエンゼルのもとにいた。
とはいっても、エンゼルがプールの監視員をやっている横で立っているだけだったが。
「あ、あの……」
ティラはなかなか会話することができないでいた。
せっかく会ったんだし――そんな理由から声をかけようとしているのだが、どうもタイミングを外している。
エンゼルのほうから話し出すことはない。
黙々と自分の仕事をこなしている。（ただし、この場合、プールに目を配っているだけだが。）
「新入り、交代だぞ」
別の監視員がやってきて、エンゼルにそう告げた。
「あと、よろしくお願いします」

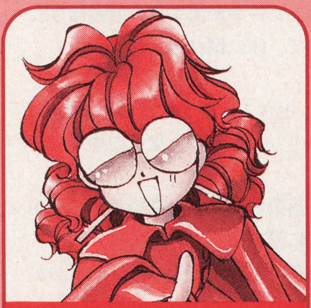


意外にも、エンゼルは礼儀正しく、交代の監視員に頭を下げた。
その態度に好意を持ったのか、エンゼルよりも少し年輩のその監視員は言う。
「……しかし、おまえさんも変わってるよな。法族(ソーサラー)のくせして、なんでこんなバイトやってるんだ？」
「法族(ソーサラー)だって、貧乏だったら働きますよ」

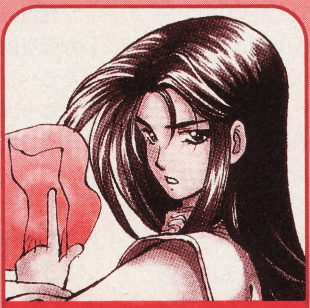
ハンターリスト



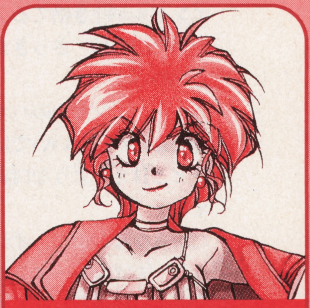
キャロット=グラッセ
爆れつハンターのリーダーながら、その性格はご存じの通りスケベでノー天気で超お調子者。魔法を受けると牛魔獣など獣人化する。



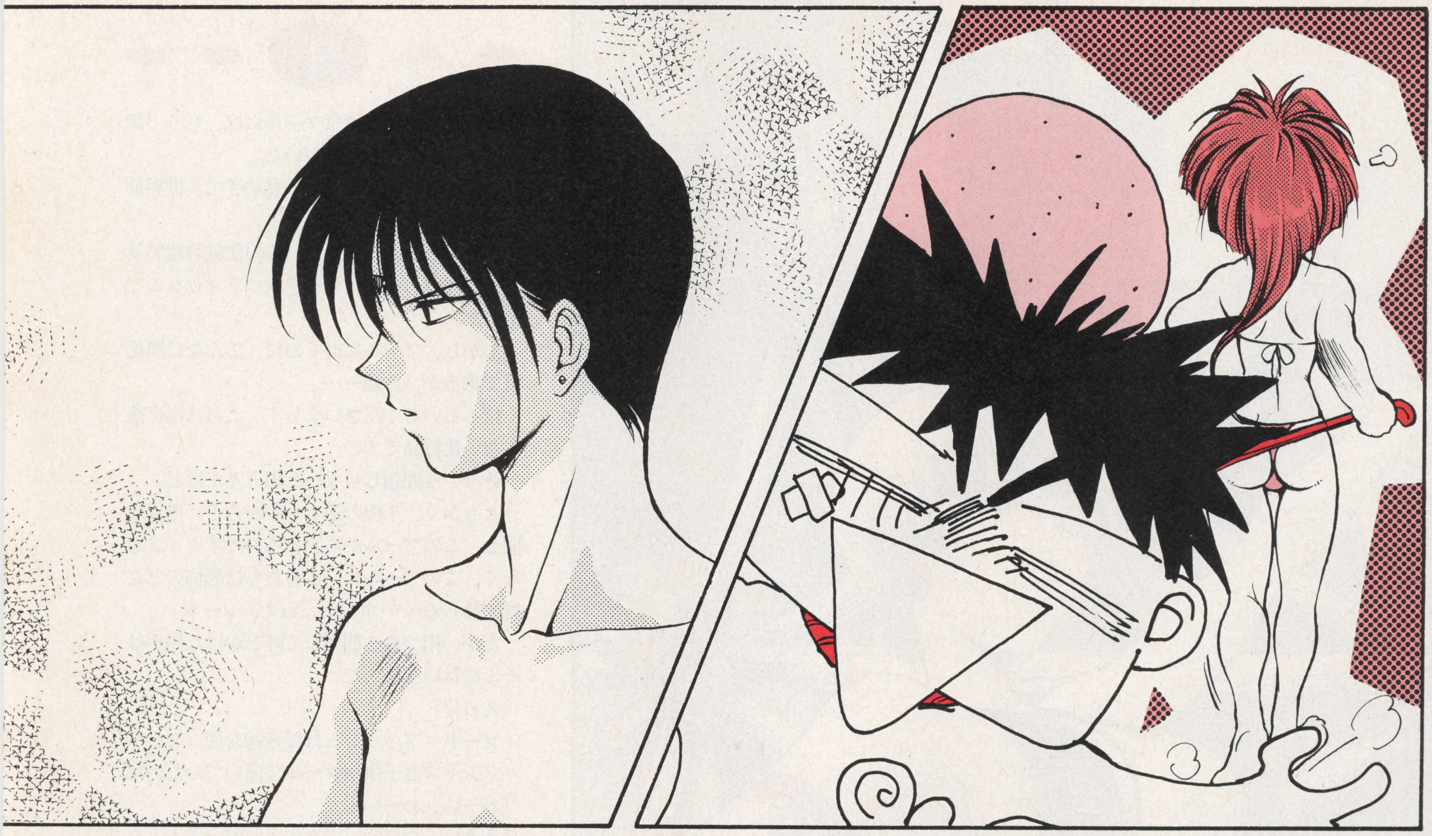
ティラ=ミス
慈愛に満ちた眼差しが、封印を解かれたとたん、恐怖のSM女王の眼光に変わる。キャロットに密かに恋心を持っている。



マロン=グラッセ
東方魔術の達人にして冷静沈着、兄のキャロットとは正反対の性格である。だが、実は強度のブラザーコンプレックスでもある。



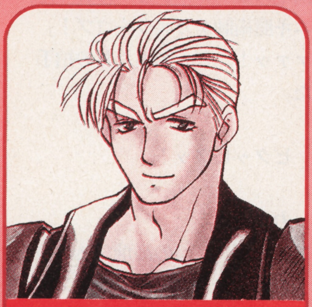
ショコラ=ミス
好きな男には一直線！　妹のティラとはこちらも正反対の性格。しかしSM女王様化した後の怖さは、まさに姉妹！　の恐ろしさ。



「そういうもんかねぇ」
訝しがる監視員を残して、エンゼルはその場から歩き出した。
ティラも思わず後ろをついていく。
しばらく歩いたところで、エンゼルがティラのほうを振り向いて言った。
「オレになにか用か？」
突然のリアクションに、ティラは思わず言葉を詰まらせてしまう。
「あ、あの……えっと……」
エンゼルは無遠慮に、水着のティラをジロジロと見た。
「へえ、あんた、プロポーション、かなりいいじゃんか」
それは、いやらしさもなにも含まれていない、ただ単純な感動の言葉だった。
キャロットとはえらい違いだ。
「えっ……」
そのニュアンスがわかったのか、ティラもいやな顔はしない。どこか照れたようにはにかんでいる。
「あんたなら、どんな服でも着られそうだ」
興味深そうにエンゼルはティラをじっと見つめる。
（え、えっと……）

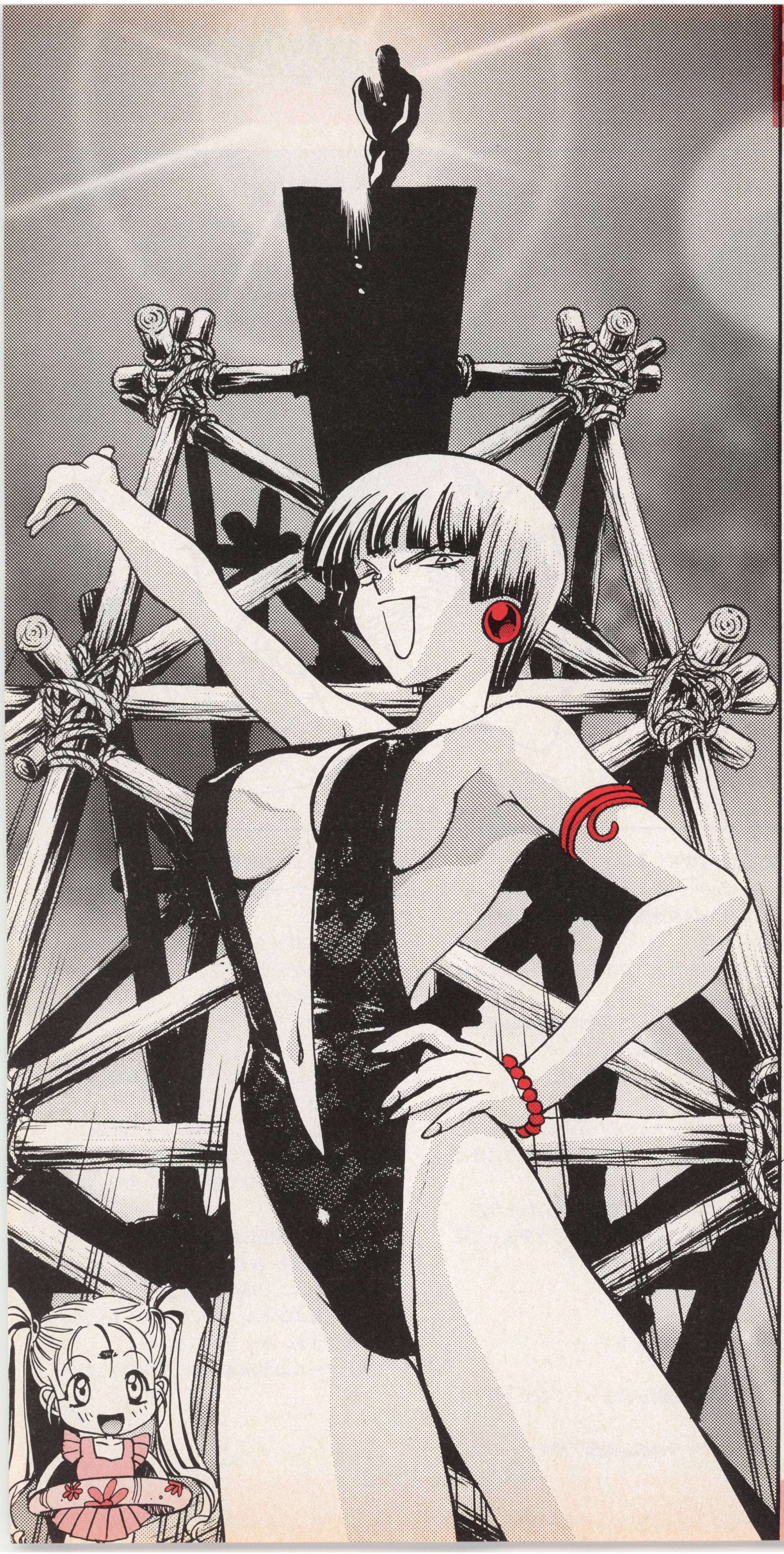
ドキドキ……ドキドキ……

なぜか胸の鼓動が高まってくるティラであった。
ふと、ティラは彼が服飾デザイナーの学校に通っていることを思い出した。
「服のデザイナーを目指していらっしゃるんですか？」
「……まだヒヨッ子さ」
「あの、どんなデザインを？」
「……見たいか？」
「ええ、ぜひ」
「…………」
デザインの話になったとき、スッと彼の表情がゆるんだ。
トゲトゲしさが消え、少年のような好奇に満ち溢れた瞳を輝かせる。
「そうか。じゃあ、見て感想を聞かせてくれよ」
エンゼルは歩き出した。
慌ててティラもついていく。
歩きながらエンゼルが言った。
「オレの名はエンゼル。あんたは……？」
「ティラですわ。ティラ＝ミス」
二人はプールの事務室の中に入っていった。



ガトー＝モカ

美に対する執着は、まさに病的。おのが肉体にもそれを求め、結果的に、物理攻撃としては究極の肉体を手に入れた法族狩り。



4

　さて、この日の市営プールには、もう一組やっかいな訪問者たちがいた。
「ホホホホ……今回こそ、私の手で、世界征服を成功させてみせますわ！」
　高笑いとともに現れた、この化粧の濃い美女――だれあろう、オータム＝フィッシュであった。
　しかし、プールに行くのに、こんなに厚化粧で来るか、普通……。
「ほっといてくださいまし！　これは水に落ちない化粧品ですの」
　そういう問題じゃないと思うんだけど。
「ともかく、千里の道も一歩から！　世界征服も、このプールから始まるのです！　まもなく、このプールにいる者たちは恐怖のどん底に落ちる……ホホホ。ねえ、ソード」
　だが、相づちを期待して呼びかけた相手はそこにはいなかった。
「えっ!?」
　ソード＝フィッシュは浮き輪を使って、ジャブジャブと子供用プールで泳いでいたのだ。
「わーい、わーい！」
「ええい、なにやってんのよ、ソード！」
「お姉様、水が冷たくて気持ちいいよ！　きゃい〜ん！」
「一生、泳いでなさい！」
　オータムは気を取り直して、高らかに叫んだ。
「ホホホホ……ともかく、我がフィッシュ一族、夏の最強の魔術師をご紹介しますわ！」
　いつの間にか、オータムのまわりには子供たちがたくさん集まっていた。
　ほとんど遊園地のヒーローショーのノリだ。
「いでよ、アニキ魔術師チカ＝ラーコブ！」
　ワァァァァァァッ！　と、子供たちの拍手がまき起こった。

　ムキムキ！　ピクッピクッ！

「みんな喜ぶ、力コブ！」
　向かい合って並んだ、二つの高飛び込みの飛び込み台の一方に、一人のマッチョマンが現れる。
　惚れ惚れするような筋肉の持ち主だ。
　スキンヘッドで、さらには全体の雰囲気に似つかわしくないやけに可愛(かわい)らしい瞳――

彼が、今回のフィッシュ一族の怪人法族（ソーサラー）、アニキ魔術師チカ＝ラーコブであった！

ムキムキ！

彼がポーズをとるたびに筋肉が躍動する。

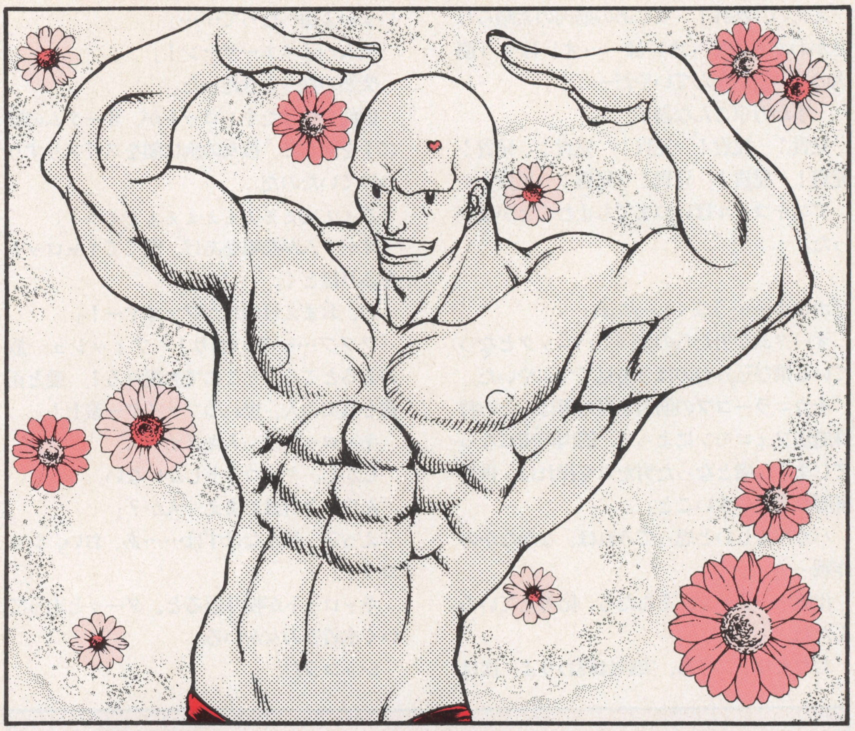
ピクッピクッ！

手を下で組むと、マッチョマンには欠かせないと言われる、あの胸のピクピク動きが遠目でわかるほどよく見える。
「みんな喜ぶ、力コブ！」

ムキムキムキ！　ピクッピクッ！

チカ＝ラーコブは調子に乗ったようにポーズをとり続けた。
「なんだ、なんだ!?　おーっ？」
最初、なにごとかと見ていた野次馬たちだったが、そのうちに彼らの目つきがおかしくなっていった。
それも男だけ。
「な、なんて素晴らしい筋肉なんだ……」
「あれこそ人類の美だ……」
「男らしい！　神のつくりたもうた、美しき肉体！」
「あー……それに比べて、オレの身体は……」
半数の男たちが自信をなくしたようにその場に座り込み、残りの半分は、チカ＝ラーコブのいる飛び込み台の下に結集した。
「兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！」
彼らのアニキコールが起こる。
その声援に応えるように、チカ＝ラーコブはさらにポーズをとり続けた。

ムキムキ！　ムキムキ！　ムキムキッ！



「みんな喜ぶ、力コブ！」
「兄貴ーッ！」
老いも若いも関係ない男たちの行動に、女たちは目を丸くするが、そのだれも彼らの行動を止めることができなかった。
ある家族連れなどは——
「ちょっと、あなた！　帰るわよ！」
「パパ〜、変！」

WANTED！

フィレオ＝フィッシュ



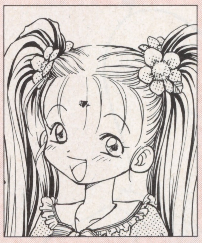
悪の法族「フィッシュ一族」の総帥。制服マニアがこうじて世界征服までもくろむおマヌケなオヤジ。正体、実力のほどはまだ不明。

オータム＝フィッシュ



フィッシュ一族の長女。ケバケバな容姿と酷薄な性格はまさに悪の女帝。異母兄のゼリーと、一族の後継者をめぐって対立している。

ソード＝フィッシュ



オータムの実妹。コケティッシュな容姿通り小悪魔的な性格。ニコニコとあまり意味もわからないままに、悪の野望の手伝いをする。

ゼリー＝フィッシュ



フィッシュ一族の長男。一見オカマ的だが、性格もやっぱり陰険、自分勝手、無責任と三拍子そろった悪役。おマヌケさも父親ゆずり。

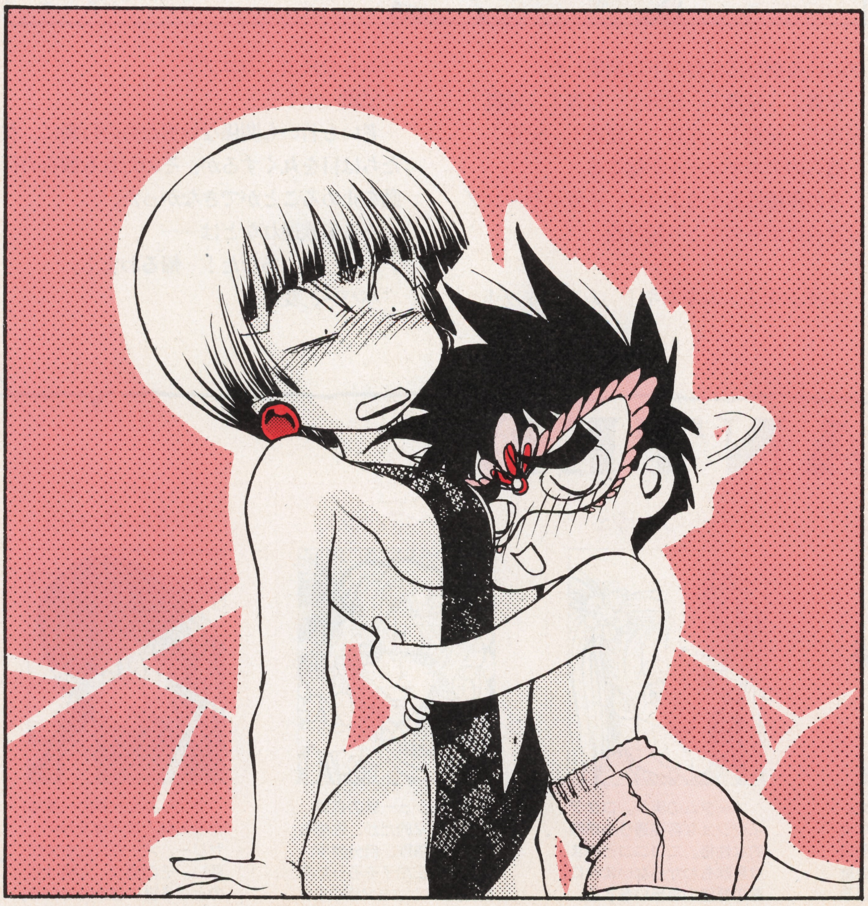
エンゼル＝フィッシュ



フィッシュ一族の一員ながら兄妹とは一線をかくし、ゼリー、オータムとも仲が悪い。その過去、人柄は今のところ謎に包まれている。

「ええい、黙れ！　女にあの筋肉の素晴らしさがわかるか！　オレは……オレはもう筋肉のない生活なんていやだーっ！」
　一事が万事こんな調子。
「兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！」
　アニキコールはいつまでも止むことがなかった。

「ホホホ……うまくいったわ」
　オータムが男たちの集団でパニックとなっている飛び込み台のほうを見てつぶやいた。
「チカ＝ラーコブの筋肉を見た男は、その特殊魔法フェロモンによって、筋肉の虜になってしまう。虜となった男たちを操れば、世界征服などたやすいこと」
　バカバカしいと思ってみれば、なかなかの作戦……。
　化粧ネーチャン、あんたも一応考えているんだね。
「おだまり！　さあ、実験は終わりよ。次はいよいよ街へ行って……」
「美人のオネエーサァン！」
　突然の抱きつきだった。
　仮面をつけたキャロットが、オータムの腰に手を回して、彼女の胸に顔をスリスリすりつけていたのだ。
「ぎぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
　オータムが悲鳴をあげ、慌ててキャロットをふりほどく。
「お、おまえは爆れつファイヤー！」
「フフフ……その通り！　フィッシュ一族のあるところ、どこにでも現れる！　愛と正義と真実の人、爆れつファイヤー参上！」
　キャロットは一人キメポーズ。
　しかし、キャロットしかいない。
「ん!?　今日はおまえ一人か？」
「えっ？　そんなはずは……あ、おい、ショコラ！」
　キャロットが振り返ると、ダーッと走っていく水着姿の女がいる。
　ショコラだ。

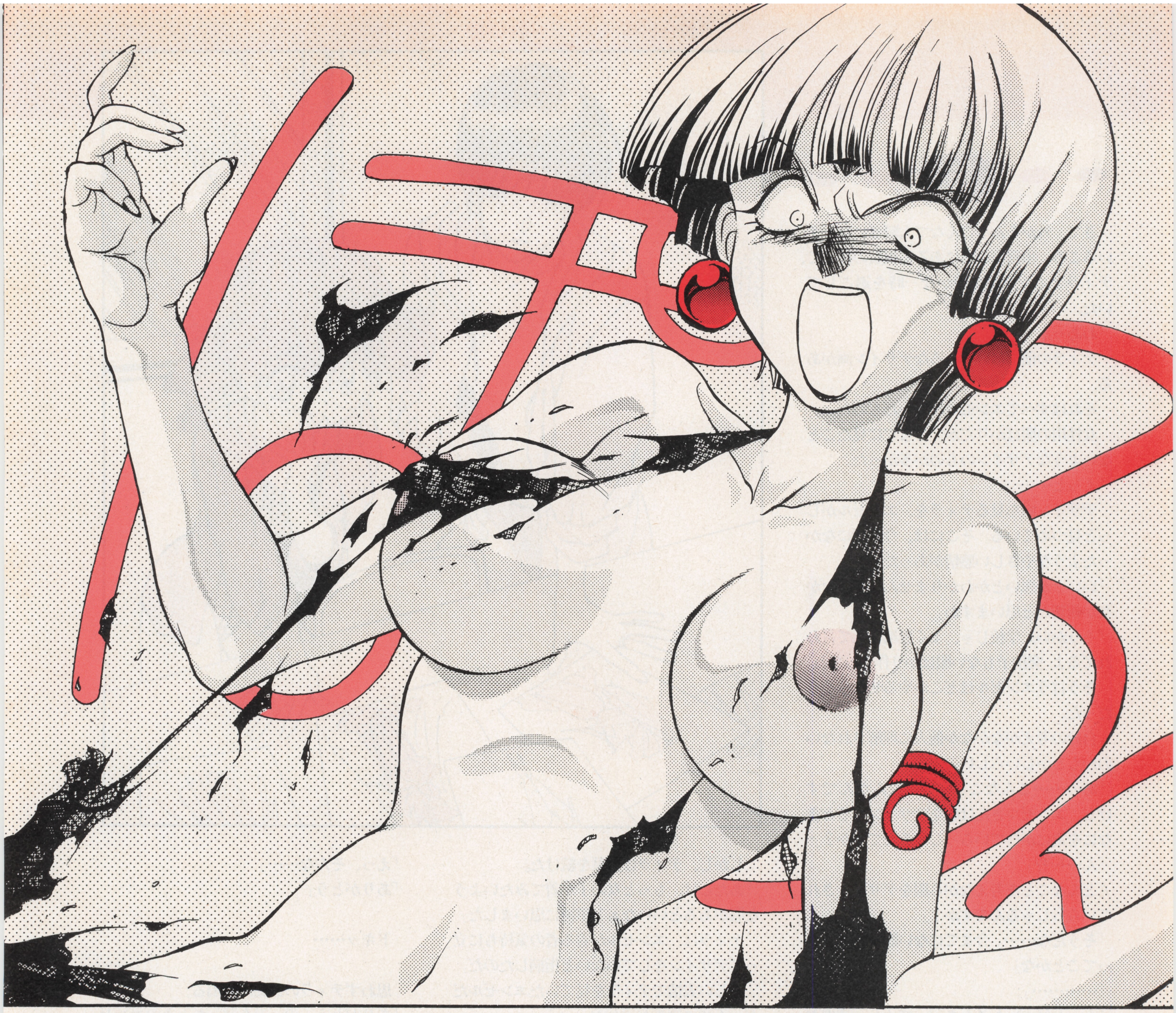


（ダーリンには悪いけど、せっかくの休みだもん。フィッシュ一族になんか構ってられないわ）
　そういうわけで、ショコラはその場を逃げ出したのだ。
「こらっ、ショコラ、薄情もん！」
　むなしくキャロットの叫び声が響きわたった。
「ホホホホ……どうやら、仲間には見捨てられたようね」
「うるせーっ！　おまえらなど、このオレ一人で十分だぜ！」
「ホホホホ……その強がりがどこまで通用するかしら？　さあ、おまえもあのチカ＝ラーコブの勇姿を見るのよ！」
「いっ？」
　オータムに促され、キャロットは思わず飛び込み台のほうを見てしまう。

　ムキムキッ！　ピクッピクッ！

「みんな喜ぶ、力コブ！」
　スキンヘッドのマッチョマンの筋肉ポーズは果てしなく続いている。
「へん、このオレ様があんなもので……あん？」
　たかが男のハダカなど……と高をくくっていたキャロットだったが、どうしたことか。
　ふらふらと足が飛び込み台のほうに歩き出したではないか。
「な、なんだ!?」
「ホホホホ……感情は納得していなくとも、おまえの身体は正直のようね！　特殊魔法フェロモンに身体が反応しているのよ！　ほらほら、このまま身も心もすべて浸ってしまいなさい！」
「ううっ、いやだっ！」
　キャロットは全身全霊を傾けて、足の動きを止めようとする。
「男なんかの虜になるなんて、絶対にいやだっ！　オレのアイデンティティが……！」
「ほら、往生際の悪い！」
　オータムはキャロットに近づくと、顔をつかんで無理矢理、チカ＝ラーコブのほうに向けた。
「うわぁ、やめろっ！」
「ほーら、あの筋肉の虜になるのよっ！」
「このォ！　こうなったら！」

《爆れつ場外乱暴!!》「キャロットが汚らわしいわけは、獣人化したときの毛皮らしい……」（福井県・ペンネーム投稿の破柿）　ホントはこれ古典なんだけど獣人化にかけたところがこのコーナー向きだな。ところでペンネームの“破柿”っていったいなんだ!?　ハガキにかけてあんのはわかっけどよ～。本当にそんな柿があんの？



ビリリリリリリリリッ！

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
いきなりキャロットは、まだ自由に動かせた右手で、オータムの水着を破った。

ブルンッ！

オータムの形のよいオッパイが飛び出してくる。
「うむう、パワーアップ！」
キャロットはそのままオータムの胸にまたもや飛びついていく。
「なにすんのよ、変態！」
「うるへーっ！　こうなったら、オレのアイデンティティが勝つか、ヤツの筋肉フェロモンが勝つか勝負じゃい！」
「離れろ！」
「やだ、離れん！」
「こ、こんなことをしたって、チカ＝ラーコブの呪縛は打ち破れないわよ！」
「こっちにだって、もう一つ、奥の手があらあ！　もうそろそろ来るはずだぜ！」
「奥の手……!?」
キャロットのいう奥の手とは、果たしてなにか!?　――とはいっても、ほとんどバレてるかもしれないので、さっそく奥の手を登場させよう。

奥の手は、プールにやってくるなり、筋肉で人々をたらし込んでいる存在を知り、怒りの表情となった。
「オレ以外の人間が筋肉を誇るとは……許せん！」
そして、奥の手は、チカ＝ラーコブのいる飛び込み台と向かい合った、もう一つの飛び込み台の上に現れたのだ。
「エセ筋肉野郎！　本物の筋肉はそんなもんじゃねえんだ！　このオレの！　このオレの筋肉を見てくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
もうおわかりであろう。奥の手とは、だれあろう、ガトーだった。

5

さて、外がそんなこんなで大騒ぎになっているころ、事務室の奥にある監視員の控室で、ティラとエンゼルが静かな一時を過ごしていた。

「わあっ！」

ティラの前にはいろいろなデザイン画がある。

それはすべてエンゼルが描いたものだ。

女性用の服ばかりだが、今までに見たことないようなデザインのものが多かった。

「えっと……」

デザイン画を見るティラを、エンゼルがじっと見つめている。そこには、今までになかったようなやさしい感情があった。

「いいとか悪いとかわかりませんけど、なかなか斬新だと思いますわ」

「そうかい。学校じゃ、よく異端なんて言われてるよ。突拍子もない服ばかり作るってね」

そう言うエンゼルはどこかやるせなさそうだった。

自分の考えがなかなか他人に理解されないのがもどかしいらしいのだ。

「あの……こんなこと聞いてなんなんですけど、エンゼルさんは服をデザインするとき、なにを気にかけていらっしゃるんですか？」

「ん……!?」

「どんなことを考えながら服をデザインされていらっしゃるんですか？」

「そうだな……。今までにない服を作りたいってことかな」

「…………」

「もっと気づいたことを言ってくれ。遠慮なく」

「…………」

ティラはさらにデザイン画を見つめた。

（感じたままを言ったら、この人怒ってしまうかしら……でも……）

うそをついてお世辞を言うよりも、ティラは自分の感じたままを正直に言うことにした。

「あの……うまくは言えないんですけど……エンゼルさんの服って、着てみたいっていう服じゃないような気がするんです」

「……！」

エンゼルはキッとティラを見つめた。

もともと目つきが鋭いため、怒っているように見えなくもない。



しかし、ティラは言葉を続けた。

「あたしは、もっと女の子が着てみたいような服があるといいなぁと単純に思いました」

ティラは、エンゼルが着る者の気持ちに立ってデザインをしていないと指摘したのだ。

厳しい表情でティラを見ていたエンゼルだが、不意に笑みが浮かぶ。

「あはははははは……」

皮肉でもなんでもなく、エンゼルは笑っていた。

「まいったよ。そうはっきり言われたのは初めてだ」

「えっ!?」

「この目つきと雰囲気のせいだな。誰も彼もオレには本当のことをなかなか言ってくれない」

「エンゼルさん……」

「正直言うと、最近煮詰まってたのさ。どういう方向にデザインを持っていったらいいか。キミの言葉で、少しわかってきたような気がするよ、ティラ」

「えっ、そんな……」

「ありがとう」

ドキッ……

思わずティラの鼓動が高鳴る。

「ありがとう」の一言を言ったときのエンゼルの表情は、まさに天使（エンゼル）のような温かみとやさしさがあったのだ。

「時間さえよければ、具体的に指摘してくれないか、ティラ」

「あ、はい……」

二人はなおもデザイン画に見つめ入った。

キャロットたちの騒動から逃れ、事務室の横を通りかかったショコラが、偶然、窓の向こうのその現場を見かけたのだ。

（ティラじゃない？　こんなところでなにしてんのかしら？）

深くは考えず、ショコラはその場を後にした。

〈爆れつ場外乱暴!!｜「カサを振り回すなんて危ねーなー（アンブレラ）」（山形県・ペンネーム強引のなかにも教養あり）　苦しー!!　とんでもねー苦しさだなこりゃ。思わず窒息しそうだったぜ俺は！…ところでちょっと気になったんだけど〝強引の中の教養〟ってどれのことだ？　まさか英語使ってっからてんじゃねーだろーな。〉

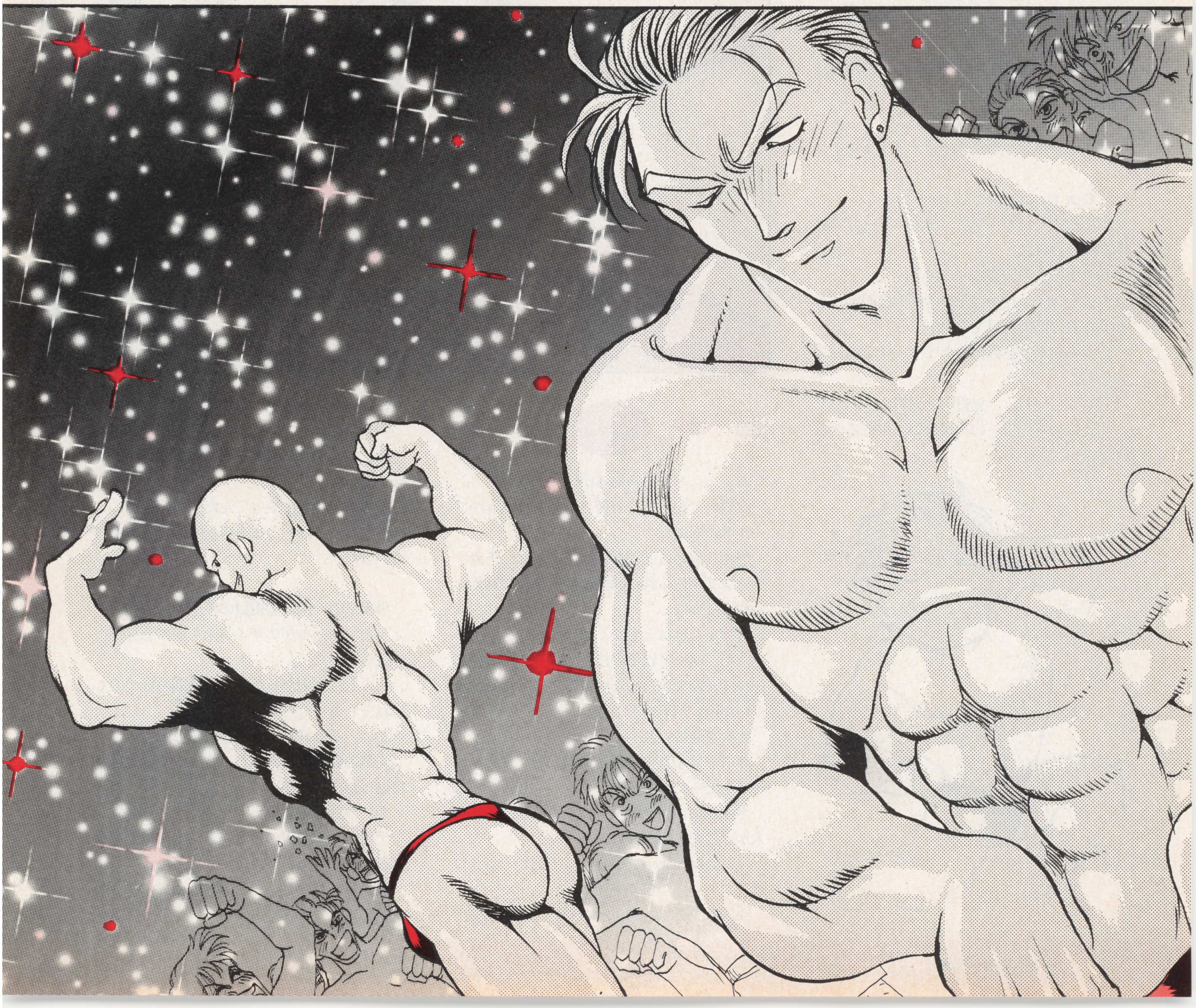
6

ムキムキムキムキッ！
ピクッピクッピクッピクッ！

「ふん！」
「はん！」
筋肉合戦は始まっていた。
お互いに己の筋肉を誇示するという恐ろしい戦いだ。
いかな特殊魔法フェロモンとはいえ、真の筋肉の前では無意味だった。筋肉野郎たちの求めるのはただ一つ——どちらが美しい筋肉か!?
その意味では、ガトーもチカ＝ラーコブも真の筋肉野郎であった。
「みんな喜ぶ力コブ！」
チカ＝ラーコブが思いっきり上腕二頭筋を強調させる。
「ふん！」
ガトーは三角筋を芸術ともいうべき美しさで披露した。
「兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！」
先ほどまで、チカ＝ラーコブのフェロモンに毒されていた男たちも、今や、ガトー側、チカ＝ラーコブ側と半々になっている。
女たちは茫然自失の体で、そのバカバカしいまでに美しい戦いを見つめるのみだ。

ムキムキムキムキムキッ！
ピクッピクッピクッピクッ！

「ガトー、負けるなよ！」
「チカ＝ラーコブ！　さっさとそんなヤツ、片づけちゃいなさい！」
キャロットとオータムもいつの間にか離れて、仲間の応援を開始している。
「なかなかやるな……ならば！」



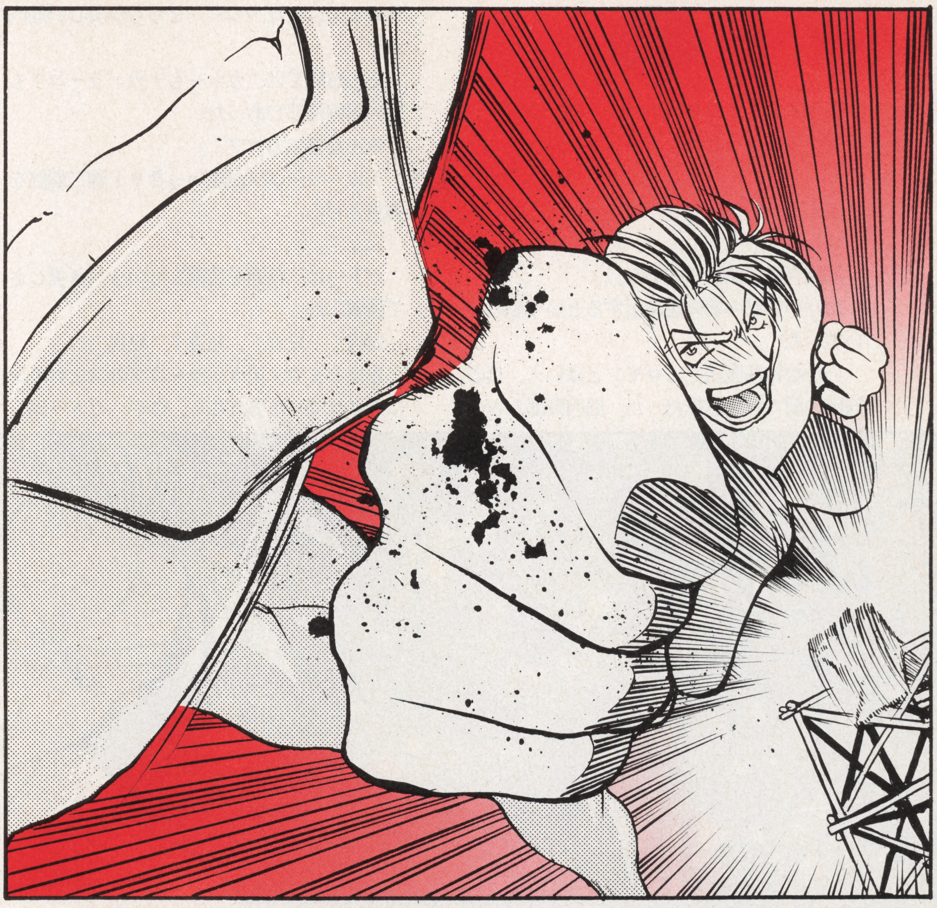
ガトーが飛び込み台の反動を利用して、大きく飛び跳ねた。

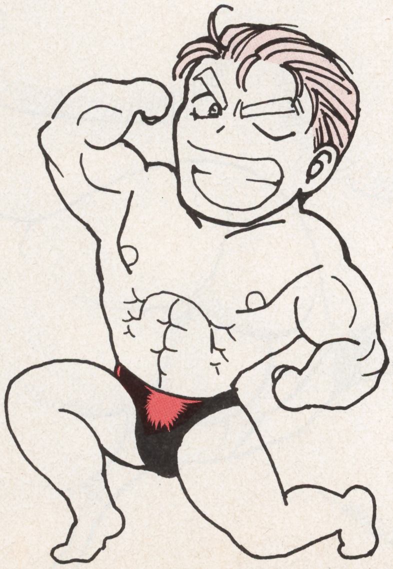
ビヨヨヨヨヨヨ〜ン！

素晴らしい跳躍力！
「なっ！」
ガトーは、反対側にあったチカ＝ラーコブの飛び込み台までジャンプしてきたではないか。
「な、なんだ！」
「フ……筋肉の美しさではほぼ五分と見た。ならば後は実用性よ！　おらっ！」
ガトーが全身に力を込めると、筋肉が一気にふくらんだ。
「このオレの素晴らしい筋肉から生み出されるパンチを受けてみろっ！」

ドゴォォォォォォォォォォォォォォォォッ！

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁあっ！」
ガトーのただの一撃で、チカ＝ラーコブは吹き飛ばされた。
そのまま空の彼方に――キラッ！
「フ……所詮(しょせん)、見かけだけの筋肉は筋肉じゃねえ。真の筋肉を見てくれ〜〜っ！」
ガトーが飛び込み台の上でマッチョポーズをとる。
「兄貴！　兄貴！　兄貴！　兄貴！」
男たちの「兄貴」の声援はいつ果てるともなく続いていた。





7

「ちぇっ、そろそろ帰るか……」
夕暮れになって、着替えたキャロットがプールサイドに立つ。
当たり前のことだが、オータムは、チカ＝ラーコブがやられた瞬間にはもう姿が見えなくなっていた。
逃げ足だけはともかく速い。
ただ、ソードはその後もしばらく子供用プールで遊んでいたのだが、そこまでは気づかないキャロットであった。
「オレを見てくれ〜っ！」
ガトーはまだ飛び込み台の上でマッチョポーズをとっている。
さすがにギャラリーも少なくなり、二、三人がいるだけだ。
「ま、あれは放っておいて……おい、ショコラ」
キャロットは、ちょうど同じく着替えて出てきたショコラに声をかけた。
「ティラは？」
「あ、あの子なら、さっきプールの事務室のほうにいたわよ」
「事務室？　なにやってんだ、あいつ？」
キャロットはそのまま事務室のほうに歩いていった。

事務室の、例の監視員の控室では、まだティラとエンゼルがデザイン画を前に意見を言い合っていた。
二人とも真剣だったので、時間の経つのも忘れてしまったらしい。
「おい、そろそろプールを閉めるぞ」
先輩の監視員に言われ、ようやく二人は我に返った。
「あ、今行きます」
デザイン画を集めると、エンゼルはティラのほうを向いて言った。
「今日はありがとう。とっても参考になったよ」

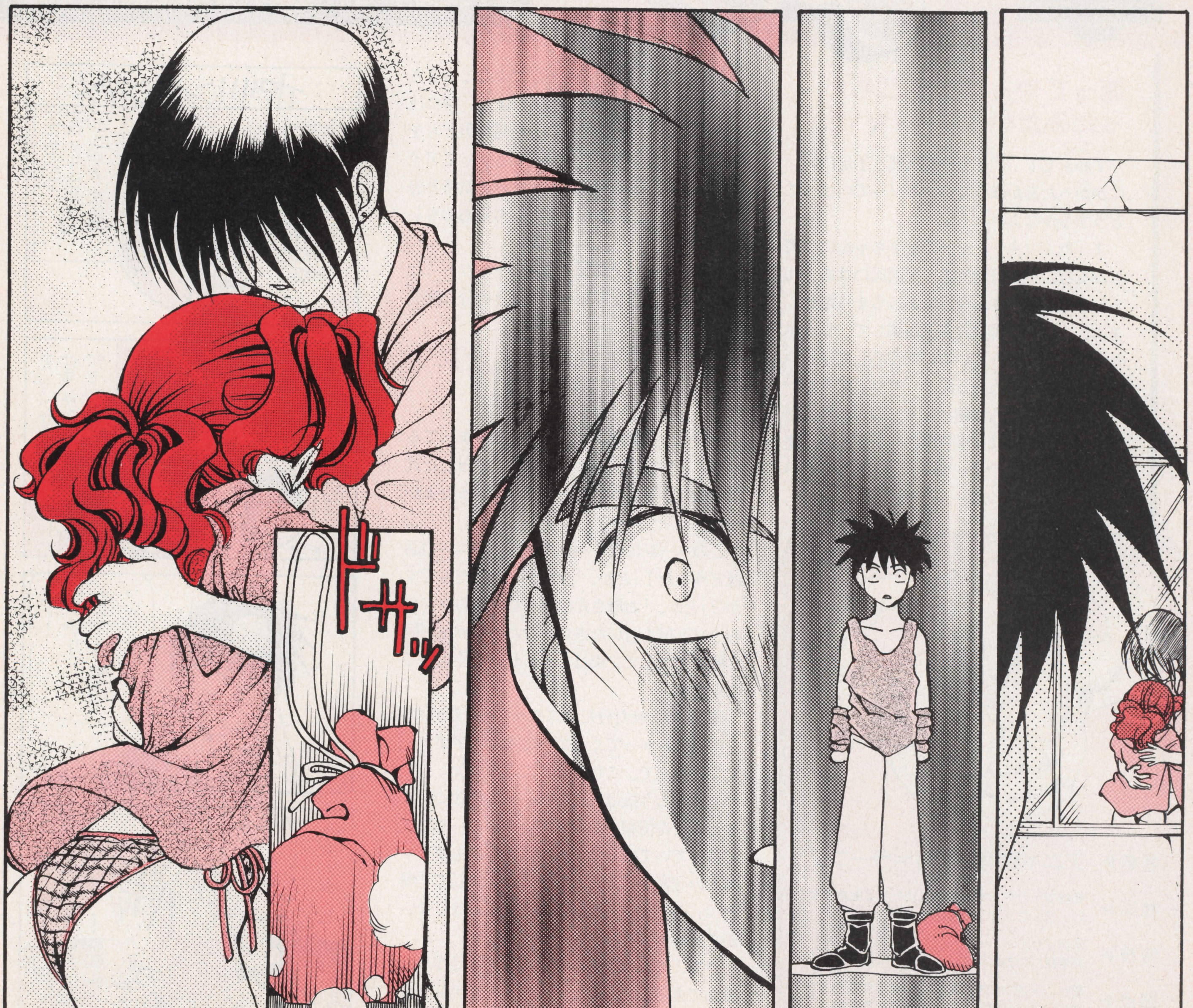
〈爆れつ場外乱暴!!〉 さて今月の一押しはこれ。まあ俺はよく言われてんでちょっとなって感じなんだけど、担当さんの推薦ということで…。「あかほりさとる、のわぁんちゃって性獣！……男は狼よ…」（千葉県・ペンネームおむれつハンター）　最後の"…男は狼よ…"ってのが笑えたぜ。"おむれつ〜"は次回が勝負だな。

「そんなぁ……」
「今度よかったら、また会ってくれないか。学校の帰りあたり」
「あ、はい」
「じゃあ」
それだけ言うと、エンゼルはそのまま出ていこうとした。
そのとき、ティラはテーブルから一枚デザイン画が落ちていることに気づいた。
「あ、これ……エンゼルさん！」
慌ててデザイン画を持ち、エンゼルのほうに駆けていく。
「えっ？」
エンゼルが急に振り返ったとき、ティラはいきおいのあまり、その胸に飛び込んでしまった。
「あ……」
「えっ……」
二人はちょうど抱き合ったような格好になっていた。
「…………」
二人はしばらくそのまま動こうとはしなかった。

ドサッ……

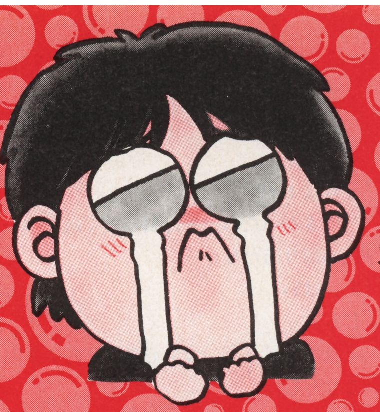
肩から荷物が落ちる。
が、そんなことも気にならず、キャロットは呆然と立ちつくしていた。
キャロットの視界には、窓の向こうで抱き合う、ティラとエンゼルの姿が映っていたのだった。

≪続く≫



MONTHLY DENGEKI BOMB!

月刊 電撃 爆



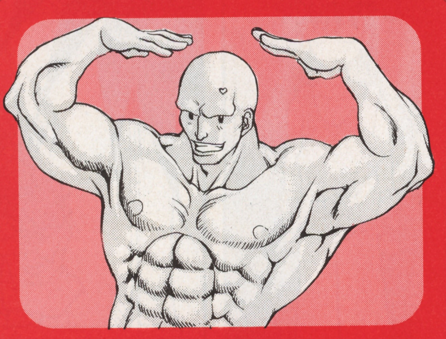
今月もきちまったぜこのページ!! 夏バテくらって倒れてるヤツ、日焼けで仰向けに眠れなくなってるヤツ、なぜか子どもの夏風邪「手足口病」にかかっちまった俺みてーなヤツ、みんな集まって今月も元気にいくぞ!!

俺ってやっぱり子どもだったみたい、ギャハハ!!

すわぁて！　子どもの夏風邪「手足口病」にかかったあかほりであ〜る（っていばってどうするかなぁホント）。

まったくマネージャーのヤギちゃんには笑われるは、担当（元外道）Y沢氏にはあきれられるは、さんざんな目にあっちまったぜ。まぁ、とにかく現在は完全復調して、しっかりカンヅメになっているので安心してほしい。（別に心配してねーって？　そりゃそうだ）

さて、そろそろ本題に入る。今月の怪人を考えてくれたのは、滋賀県のペンネーム「オシメ戦隊・爆れつシャワー」だ。どうでもいいけどすずえペンネームだな。



名前▶ アニキ魔術師チカ＝ラーコブ

魔術▶ 筋肉フェロモンで、自分を見た男どもを虜にし、社会生活から脱落させる。

特技▶ ボディビル
無意味な力みポーズ

弱点▶ 実は、実用性のまったくない筋肉なので、すばやい動きや強い力には太刀打ちできない。

制作▶ 滋賀県・オシメ戦隊・爆れつシャワー。「僕はモーホじゃありません」との注釈つき。

季節もよし、キャラも下品でよしと、まさに「爆れつＳＰ」向きの怪人だよな。特に技の「筋肉フェロモンで、自分を見た男どもを虜にし、社会生活から脱落させる」ってアイデアが抜群。よく考えると、すげぇ気持ち悪いけど、こういうのがネタとしちゃあおもしろいんだ。

今後も「オシメ戦隊・爆れつシャワー」は精進して、秀逸な下品ネタを思う存分に開発するよーにな。

ついにTVアニメ正式決定。オンエア10月開始!!

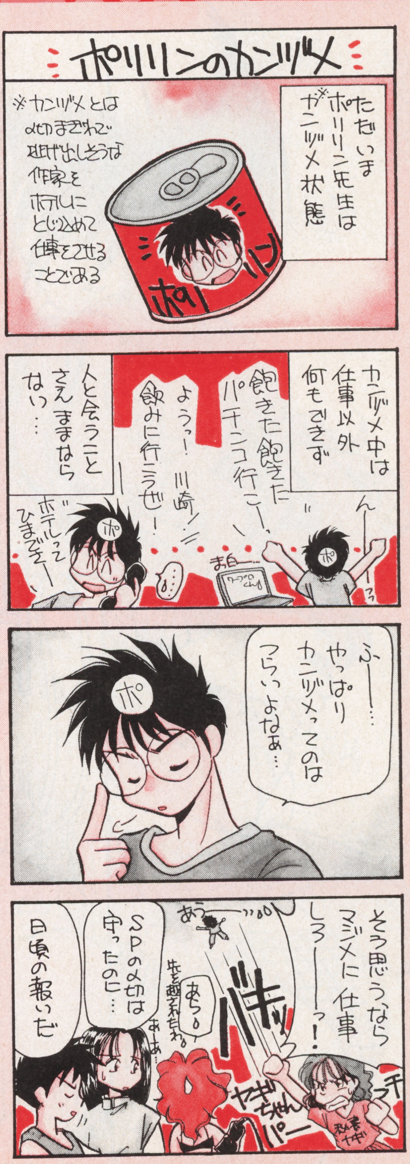
いや〜、詳細は次号送りになっちまってるけど、ＴＶアニメのオンエアが、やっと正式に発表できるようになったぜ、よかったよかった。

このページに届くハガキにも、「アニメの話はどうした！」とか、「企画がボツったんですか!?」とか、「お母さんは怒らないからウソならウソと早く言いなさい」なんてハガキが届き始めてたんで、実はもうしわけなく思ってたんだよ。

まあ、待たせた分だけスタッフも、「爆れつ」を本当にわかってくれている人たちが集まってくれたんで、これで許してくれよな。

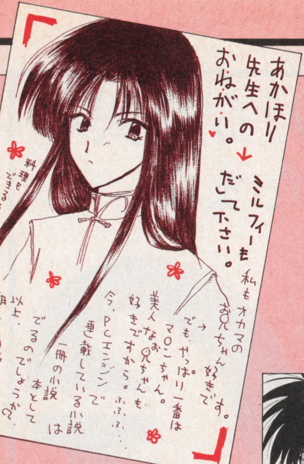
もちろん今後は、このページの読者に向けてどんどん情報を紹介していくから、期待して待っていてほしい。まずは来月の主要キャストの発表が第１弾ってとこか。決して「爆れつ」のファンを裏切るようなまねはしないから安心してくれ。

さあ、これでなんの憂いもなく作品作りに没頭できるってもんだ。よし、一発テンション上げるために、遊びに行ってこよ〜っと!!



メール オブ 爆

あんまりマロン人気ばかり言ったからか、今月はキャロのイラストがだいぶ増えたぞ。まあ、主人公なんだから、このぐらいで普通なんだろうけど……。ただ暑っ苦しいからなあコイツ。来月あたりは涼しいのを頼むぜ。



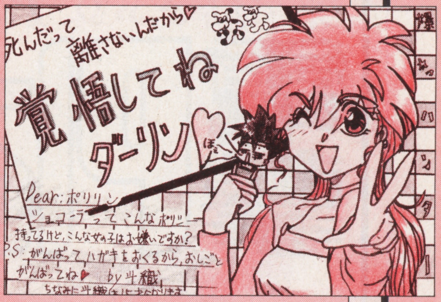
▲秋田県・田中梅子さん　ミルフィーユかぁ…。みんなの考える怪人次第だなぁ。



▶群馬県・星さん　マロンファンは深いの〜。絵もカワイイぞ。



▶栃木県・葵あさきさん　数少ない(笑)キャロットファンの声。



▶茨城県・倉持斗織さん　ショコラのような女の子ねえ。どうかなぁ。



▶群馬県・花咲京さん　花咲京は場外乱暴とダブルの掲載だ!!



▶岐阜県・柴ゆかりさん　ムム、こんな所にもミルフィーユが…。



▶千葉県・もんじさん　キャロの人生は俺も不思議に思ってるぞ。

スペシャルリンクス あかほりさとる のわぁんちゃって 本まんがの森シアター SAY YOU! JOQR 出張版

前号でお約束の通り、今月は番組の制作者サイドをチェック!!　２人のディレクター、大口さんと糠川さんに、インタビューしてみたぞ。

実は行き当たりばったり!? 制作現場はいつもパニック

――さっそくですが、ポリリン、ケロリンのパーソナリティ起用決定のあたりから……。

大口氏　最初'94年４月〜９月までの予定で「爆れつハンター」の第１シリーズをオンエアしたんです。正直あかほりさんは、初のラジオということで、起用に不安があったんです。でもこれが杞憂でしかなかったのは、番組の好調さが教えてくれました。

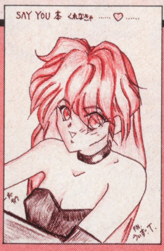
で、昨年の夏からこの２人を使った第２弾をぜひ、と思ってスポンサーを募りまして……。きっと「受けときゃよかった〜」と思ってる会社もけっこうあると思いますよ(笑)。

糠川氏　本番前の打ち合わせも本当ににぎやかで、ハガキ選びをしながらの、２人のボケとツッコミを聞いてると、ついついこちらも引き込まれて、気がつくと時間ギリギリ。「え〜い、残りはスタジオでえい」なんてことも多いですね(笑)。

大口氏　パソ通の「ニフティ・サーブ」に部屋を作ったのもそのノリでした。打ち合わせであかほりさんの、電子の要塞のごとき事務所を見て、「すぐやろう、今やろうっ」って……。

糠川氏　きわめて綿密に計算された、行き当たりばったりです(笑)。

大口氏　まずいよ仕事ぶりがばれるって(笑)。



▲埼玉県・うぃず．Ｔ．さん　ちょっと大人っぽいティラ。



▲神奈川県・轟みくさん　みょーにさわやかな２人だね。



◀録音中にもガンガン問い合わせが入る。本当は大変なんだろうけどサービス精神旺盛な大口さん。ありがとうございます。

▼さすがに本番中は真剣な顔。これが飲み屋に行くと○○○が×して□□□になっちゃうんだからもう。



今後もいろんなメディアにチャレンジは続くのだ!!

――今後も今のノリでいくんでしょうね。

大口氏　そこがこの番組の魅力ですから…。でも、がんばって全国ネットにしたいですね。番組本の売れ行きや、「電撃ＰＣエンジン」を通して届くハガキを見ても、電波の弱いところにもファンがいてくださいますし。

糠川氏　９月10日に３回目が行われる公開録音(次号で取材紹介)の評判もいいですしね。番組のＣＤやムックなど、どんどんパッケージを生み出す番組にしていきたいです。

大口氏　そうなればまたウェストのサイズがど〜んと(笑)。

糠川氏　そうなんですよ!!　この番組で集まる方たちってすごく飲むんで、私の腹はもう育ちっぱなしなんです(爆笑)。でもこのまま美酒の飲める楽しい番組でいきたいですね。



▲埼玉県・丸山祐司さん　カワイイティラをありがとう。

